Japanese Association for Religious Studies

教義と敬虔

――フィリピン・カピス州におけるカリスマ刷新運動の事例から――

東　賢太朗

〈論文要旨〉　本稿は、フィリピン・カピス州最大のカリスマ刷新運動Divine Mercyの事例から、宗教経験についての客観的評価と主観的リアリティの並存状況について考察する。

Divine Mercyで行われる「癒し」の活動は、神への敬虔な祈りによって病が治癒するというものである。カトリック教義に則った「癒し」に対して、呪医による民間治療行為は誤ったものとされる。「憑依による啓示」の活動では、イエスやマリアなどの霊的存在がミディウムに憑依し、Divine Mercyや各メンバーに対しての啓示を行う。その活動はカトリック教会から否認されているが、メンバーはその奇跡を敬虔さへの報いであると説明する。

自らの敬虔さを確保するため、あるときは呪医を非難することで自らの教義的な正統性を主張し、またあるときは教会から否認された異端性を引き受ける。そのような、正統であっても敬虔、異端であっても敬虔という状況に注目することから、単なる教義への追随ではない、絶え間なき主客認識の交渉過程が明らかになる。

〈キーワード〉　教義、敬虔、フォーク・カトリシズム、カリスマ刷新運動、フィリピン

一　はじめに――民衆カトリシズム論の不自由さ――

宗教的な事象に対して経験論的に、かつ実証的にアプローチしようとする際の問題の一つに、当事者の宗教体験のリアリティの正当性と、その成否を外部から評価する際の多くの場合権威的な指標との距離感が挙げられる。例

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

えば、「神の声を聞いた」という一信者の神秘的体験を、その信者が属する教団側が公式な教義からは認められないと判断した場合。あるいは、それが変性意識であるという精神分析的な説明や、社会的な被抑圧者による抵抗の一形態であるという社会的文脈からの説明が行われた場合。その距離を、たんに主観と客観、あるいは実践と分析の間に横たわるアポリアだと一般化するのは容易いが、それでは宗教の研究者としてどちらか一方（多くの場合は後者）への方法論的な立場の設定は、当事者自身が実は主観的経験と客観的判断をどちらも有しており、かつそのバランスをとることに苦心しているという状況を置き去りにしてしまう。

本稿も、そのような主観的宗教体験のリアリティと、分析的な客観的判断のあいだにおかれた人々についてのものである。対象とするのは、フィリピンのある地方を中心に活動するカトリック・カリスマ刷新運動の一グループである。統計によれば、フィリピンの総人口約七千六百万人に対して、およそ八一％がローマ・カトリック信徒だとされている。[1] その特徴として、スペインによる植民地化＝カトリック化によって持ち込まれた外来のカトリック信仰と、先スペイン期の在来の精霊信仰とのシンクレティズムがこれまで指摘されてきた。それは、フォーク・カトリシズムや民衆カトリシズムと呼ばれている。リンチによれば、カトリック教徒の宗教活動は、「公式」と「非公式」に分類され、前者にはカトリック教会より「規定」または「奨励」されるもの、後者には「黙認」、「不許可」、「非難」されるものがある。[2] フォーク・カトリシズムとは、「非公式」に分類され、かつ民衆的起源を持ち、実践され、そのコミュニティにおいて伝統として認められているものだとされる。[3]

以上のような観点からのフォーク・カトリシズム研究に対しては、文字資料の存在しない先スペイン期の宗教状況を、植民地行政官や宣教師の残した資料から再構成する擬似的歴史観に対する批判はもとより、日常的な信仰実

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

践の状況においては、ある要素が精霊信仰的で、またある要素がカトリシズム的だと決定することが不可能であるというフィールドワーク経験を起点とした疑問が提出されている。(4) 本稿でも、そのような批判的立場を基本的には継承しながらも、先に述べた当事者の主観的リアリティと外部者による客観的評価のズレに注目していく。

すでにリンチによる定義で確認したように、フォーク・カトリシズム概念には、ある宗教活動が公式か非公式かを分類するカトリック教会側の権威的な視角が内包されている。そして、その際に分類の指標として用いられるのがカトリック教義である。すなわち、教義に照らし合わせて問題無きものが「公式」の活動であり、そこから逸脱しているものは「非公式」となる。フィリピンのカトリック信徒の信仰実践がフォーク・カトリシズムとして名付けられるとき、それが公式から非公式までを射程におさめるカトリシズムの連続体モデル内にありながらも、けっして教会によって「規定」や「推奨」される公式の行いではないという周縁化が行われているのである。(5)

さて、そのような権威的指標としての公式教義が、自分たちの信仰実践の評価に適用されているということについて当事者が十分に意識しているというのが、本稿で扱うカリスマ刷新運動の事例である。そこでは、教義という評価基準に適合するような宗教活動を大筋では行いつつも、公式と非公式の領域を往来することによって自身の経験のリアリティと折り合いを付けていく信仰実践の様相がみられるであろう。以下、二ではカピス州におけるカリスマ刷新運動 Divine Mercy について概観し、三と四では特にその「癒し」と「憑依による啓示」の活動に注目した後、五で上に提起した問題に立ち戻って考察を行う。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

二　カピス州におけるカリスマ刷新運動 Divine Mercy

まず、調査地の概要について簡単に述べておく。[6] フィリピン・カピス州は、ビサヤ地域の最西端に位置するパナイ島の四州のうちの一州である。人口は約六十五万人で、そのうち約十二万人が州都のロハス市に住んでいる。言語は西ビサヤ地域のリンガフランカでもあるヒリガイノン語が話されている。[7] 州内におけるローマ・カトリック信徒の割合は約九三％である。[8] また、カピス州は一州で、カピス大司教区を構成してもいる。[9]

次に、カリスマ刷新運動（Charismatic Renewal Movement）についてである。カリスマとは、第二バチカン公会議公文書において「聖霊が、信者をして、教会の刷新や向上に役立つ種々の仕事や奉仕を、自発的に行いうるように する特別な恵み」[10] と定義されている。預言や異言、病を治す力など、聖霊からの賜物をその活動の中で強調するのがカリスマ刷新運動である。二十世紀初頭にプロテスタント教会で起こったペンテコステ運動がカトリックやその他諸教派に波及し、カリスマ刷新運動と呼ばれるようになった経緯から、カリスマ刷新運動はプロテスタントとカトリックを横断し架橋するものだといえる。また、この運動は世界規模で進行しており、グローバルな性格を持つものでもある。

本稿で扱うカリスマ刷新運動グループ Divine Mercy（邦訳では「神の慈しみ」）は、正式名称を“Jesus is Lord Believers: Disciples of the Divine Mercy”という。全参加者約二万人を誇るカピス州最大のカリスマ刷新運動である。Divine Mercy は、カピス大司教区公認の宗教組織（Religious Organization）の一つとして活動している。[11] これは Divine Mercy が、他のカリスマ刷新運動や、礼拝・教会活動の補助を行うその他の宗教組織と同様にカトリ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ック教会に属しているということを意味している。[12] つまり、Divine Mercy の活動はカトリック教会の指導下にあり、認められた正統なものということになる。

Divine Mercy は、外国起源のグローバルな運動やマニラ発祥のナショナルな運動とは異なり、カピス州から始まった運動である。全ての活動で、地域言語のヒリガイノン語が用いられている。現在活動は拡大中であり、州内だけでなく州外にも支部が設置され、フィリピン国内の他地域やときには海外からの参加者もみられる。そして、その活動には後述するように癒しや憑依による啓示などカリスマ的な要素が強く見られる。

以下は、Divine Mercy の略史である。一九七九年に七人のメンバーで発足した毎週日曜日の祈禱会は、大司教区の承認が得られないため雨漏りのする廃墟で行われていた。一九八四年、祈禱会に加え三ヵ月ごとの黙想会を開始すると、参加者数が増加し始めた。翌一九八五年には、メンバーの癒しによってポリオの少年が完治するという最初の奇跡が起こった。また同年、「活動場所を提供する」という神の啓示があった。一九九〇年、ある参加者が土地の提供を申し出て旧黙想会場（Retreat House）の建設が開始される。翌一九九一年、旧黙想会場が完成し、参加者が五〇〇人を超える。一九九四年、かねてよりの問題であった「経済的援助」と「教会からの理解」を約束するという神の啓示がある。その直後、富豪のO家と引退したD神父が活動に参加し、前者の活動への経済的支援と、後者による教会との交渉と承認により啓示は成就する。このとき、参加者数は二〇〇〇人を超える。二〇〇一年、参加者数の急増加によって旧黙想会場が手狭になったため、O家の支援によって現黙想会場を建設。それに伴い黙想会を毎月開催し、活動が現在の形となった。

略史からも分かるように、二十年ほどで参加者数が急増し運動の規模が拡大したため、現在ではその組織構成も

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

複雑化している。組織としてのDivine Mercyの最高決定機関は、十五名のメンバーによって構成される評議会(Council)である。その中から、二年交代でリーダーが一名選出される。評議会の下には、市町ごとに設置された支部(Chapter)があり、それぞれの支部には支部長とそれを補佐する副支部長が任命される。[13] 各支部には多くの場合、地域共同体ごとの下部組織があり、それぞれにリーダー的役割を果たすメンバーがいる。その他に、神を称える歌と踊り(Joyful Dance)の伴奏を行うバンドMusic Ministryや、後に詳述する「癒し」を行うヒーラー集団であるHealing Ministryなどがある。また、運動の規模拡大を象徴する役職として、黙想会など大人数の集会警備に当たるPeace Officerや、交通整理を行うTraffic Officerが挙げられる。両者共に、現役の警察官が任命される状況などからも、カピス州におけるDivine Mercyの影響力が窺える。その他一般メンバーの中でも熱心なものには各支部や下部組織での何らかの役割が与えられる。

最後に、Divine Mercyの活動内容についてである。Divine Mercyの活動は、全体としての活動と個別の活動とに大別できる。前者には毎月第二土曜日と日曜日に行われる黙想会や毎月第一日曜日のキャンドル・ライティング、毎週月曜日の教会での祈禱会、また年一度の各支部の創設記念日などがある。後者には、支部やその下部組織ごと、あるいは有志メンバー集団による自発的な祈禱会や集会が挙げられる。特筆に価するのは黙想会であり、ここには毎回全支部から多くのメンバーが参加する。[14] 黙想会は、Divine Mercyへの加入式としての性格を有しており、通過儀礼的な行事が多々見られる。[15] 新加入者は、黙想会場で一泊二日を共に過ごし、その間に後述する「癒し」や「憑依による啓示」、またD神父による礼拝などを経験する。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

三　Divine Mercyの「癒し」と呪医批判

Divine Mercyでは、その他のカリスマ刷新運動やペンテコステ運動と同様に、病者のために祈ることによって病気を治す「癒し」の活動が行われている。「癒し」の対象となるのは、肉体的なものと精神的なものとを含む全ての病気である。そこでは、近代医療における薬を用いなくても、祈りと聖水の塗付によって全ての病気が治ると主張されている。医者から見離された難病や不治の病が治癒したという奇跡譚は後を絶たず、多くのメンバーにとって、「癒し」はDivine Mercyの諸活動に参加する最初の動機となっている。

「癒し」の活動は、Divine Mercyのほぼ全ての集会で行われる。先述したように黙想会や、教会での祈禱会、また大規模小規模を問わずメンバーの集まる集会などで、「癒し」は頻繁に行われている。近代医療設備がほぼ普及したといえるカピス州においても、医療費や交通手段の問題で近代医療へアクセスしづらい人や、医者では治らない病気だと診断された病者の存在を考慮に入れれば、Divine Mercyにとって「癒し」は新たなるメンバー獲得にも大きな役割を果たしているといえる。(16)

「癒し」を行うことができるのは、Divine Mercyから公式に認められたヒーラーのみである。ヒーラーは現在一二〇名ほど存在し、先述のHealing Ministryとよばれる集団を構成している。Healing Ministryは集団としてDivine Mercyの全体活動に参加し、(17)またヒーラー個人として個別集会に参加し、「癒し」の活動を行う。ヒーラーになるための条件は二つある。まず、Divine Mercyの「癒し」によって病気が治癒した経験があること。次に、後述する「憑依による啓示」においてヒーラーになるよう告げられていること。この条件を満たした後も必ずしも

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ヒーラーになる必要は無いが、その「運命」を受け入れる決意をしたものは、まず自分の家族や友人に対して「癒し」を練習し、それから他人に対しての「癒し」を開始する。その後、ある程度経験を積むと、身分証明書が発行され正式にHealing Ministryの一員になる。

病者の病を治すという特殊な「癒し」の力を身につけたヒーラーたちであるが、彼／彼女らは、それが自分たちの個人的な資質や能力によるものではないと主張している。理由として、「癒し」において病者の病を治しているのは、あくまでも神の力であり自分たちの体はその力が宿るための道具にすぎないという認識が挙げられる。ヒーラーたちが「癒し」で行っているのは、ひたすら敬虔に祈ることにより神の慈悲としての病気の治癒を与えてもらうということである。そのため、ヒーラーだけが祈るのではなく、病者も共に祈り、罪を悔い、神の慈悲を請わねばならない。「癒し」の現場では、聖水の入ったコップを病者に持たせ、それをヒーラーが塗付しながら祈るという光景が見られるが、[18] その前後にはヒーラーが患者のカトリック信徒としての生活に対して指導を行うこともある。例えば、教会に行っていない、あるいはロザリオの祈りを行っていないといった不信心が病気の原因となるのであり、完全に治癒するためには改心して信徒としての自覚を持った敬虔な信仰生活を送り、神への祈りによって慈悲を請う必要があるのである。

ところで、Divine Mercyでは現在、「フィリピンにはびこる迷信を撲滅する」という活動目標を掲げている。迷信の存在は、フィリピンのカトリック信徒がいまだ未熟な原因であるとして、集会等で行われる指導的メンバーのスピーチでは、ことあるごとに迷信の実践が痛烈に批判される。[19] そこで挙げられる迷信には、精霊への供物儀礼、お守り、呪文、占いなどがある。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

それら迷信の中で、もっとも批判されるのが呪医（*medico* または *manogbulong*）である。フィリピンにおける呪医とは、呪的な力や薬草などを用いて病気を治療する民間治療師的な役割を果たしている。[20] その活動においては、上に挙げたフィリピンの迷信のほとんどが実践されている。まず、呪医の多くはカトリック教徒であり神の力を受け活動しているといいながら、一方で精霊（*duende* や *talumanon*）にも通じている。例えば、供物儀礼では、豚やニワトリなどの犠牲を精霊に捧げ病の完治を祈願する。このような行いについて Divine Mercy では、三位一体説における神の聖霊（*ispirito sang Ginoo*）以外の超自然的存在はすべて悪魔の精霊（*ispirito sang yawa*）であり、供物儀礼は悪魔崇拝であるとして厳しく批判している。[21] また、呪医が不幸から身を守るために作るお守り（*panaming*）や、治療の際に唱える呪文（*orasyones*）、手相占い（*pangkimalad*）やカード占い（*pabaraha*）などについても同じく精霊＝悪魔の力を用いているとして禁止している。[22] さらに、呪医が治療の際に用いる薬草に関しても、聖水と祈りのみですべての病気が治るという「癒し」の教義から批判している。そして、もっとも痛烈に批判されるのが、呪医が治療の際に受け取る金銭での報酬である。先述の通り、「癒し」とは神の力によるものであり、そこに金銭報酬は発生するはずがないという見解からである。

Divine Mercy では、呪医に対する以上のような批判的見解から、活動への呪医の参加はもちろん、メンバーが呪医を利用することについても厳しく禁止している。Divine Mercy の活動が拡大し、地域共同体レベルでのメンバー数が増加するに伴い、呪医の活動に対する批判が草の根レベルまで到達し緊張が発生する状況もしばしばみられる。これまで潜在的なクライアントであったコミュニティ内の人々からの批判に対し、あくまで活動を継続する呪医も存在するが、中には呪医活動をやめ Divine Mercy のヒーラーに転身するケースも見られる。[23]

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

以上を小括する。Divine Mercyで行われる「癒し」の活動は、敬虔な祈りによって神の慈悲を請うことにより病が治癒するというものである。そこでは、カトリック信徒としての教えを守ることが強く意識されており、かつそれに適合するものとして「癒し」が行われている。それに対し、呪医の民間治療行為は迷信であるとしてDivine Mercyによって批判されている。その際に、神／悪魔二分法に代表されるカトリック教義が批判の根拠となっている。つまり、Divine Mercyは、呪医の活動を誤ったものとして批判することにより、結果として、自分たちの「癒し」をより教義に照らして正統なものとして主張しているのである。

四　Divine Mercyによる「憑依による啓示」と教会の否認

「憑依による啓示」は、Divine Mercyの活動の中でも「癒し」と並んで特徴的なものである。内容は、特定の人物にイエスや幼きイエス、聖母マリアなどが憑依し、メンバーに向けての啓示を行うというものである。憑依される人物はミディウム（medium）と呼ばれ、男性の場合も女性の場合もある。男性の場合はイエスが、女性の場合は幼きイエスや聖母マリアが憑依することが多い。[24] Divine Mercyのリーダーは、代々ミディウムとなる才能を与えられると言われており、現リーダーの男性にも黙想会でイエスが憑依し、参加者全員に対して啓示を与えている様子が観察できた。また、いくつかの地域共同体レベルの集会においても、ミディウムとなる人物が参加して「憑依による啓示」が行われる状況がみられた。ミディウムには誰でもなれるというわけではなく、神に選ばれた人物にのみ与えられる特別な賜物だといわれる。

啓示の内容には、「〇〇村での祈禱会を開始せよ」というDivine Mercy全体に向けたものと、「お前の病気がな

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

かなか治らないのは夫の不信心が原因だ。毎週日曜日は夫と共に教会礼拝に参加せよ」というような個人にむけての啓示がある。例えば、筆者が継続的に参加していた毎週火曜日と金曜日に行われるO家の祈禱会では、ほぼ毎回ごとに「憑依による啓示」が行われていた。祈禱や「癒し」が行われた後、女性ミディウムが祈りながら次第に体を前後に揺らしトランス状態に入っていく。すると、参加者はその周りに集まり幼きイエスや聖母マリアの憑依を待つのである。その女性ミディウムの場合、個別の啓示はブツブツと低い小さな声で、全体に対しては甲高い声で啓示を行っていた。個別の啓示が始まると、参加者は祈禱所のミディウムの前に長い列を作って順番を待つ。自分の順番が来ると、参加者は女性ミディウム（＝憑依霊）に対して日頃の悩み事を相談したり、今後の人生の指針を尋ねたりする。それに対する答えが語られるときもあれば、ただ祝福がなされる場合もある。いずれにしても、啓示の内容は各参加者にとって大変貴重なものとなる。全体に対しての啓示も、集団としてのDivine Mercyや個別の集会の活動方針を決定する上で重要な意味を持つ。またO家では、啓示の内容は全て録音され後にタイプされていた。それらは全て保管されるが、個人に向けたものについてはコピーされたものが各人に渡される。

さて、Divine Mercyがカトリック教会に属する宗教組織の一つとして活動していることは先に述べた。その際に、教会が宗教組織を指導する具体的な方法としてspiritual directorとよばれる制度が挙げられる。これは、各宗教組織に最低一名以上の司祭を指導者として任命するというものである。[25] Divine MercyのspiritualdirectorにJ任命されているのは、J神父という司祭である。しかし、J神父はDivine Mercyの活動に関心が無く、活動に一度も顔を見せたことのない名目上の存在であるという。その代わりに、すでに引退した司祭であるD神父がDivine Mercyの活動に関心を寄せ、活動にも頻繁に参加している。D神父は、教会の理解を得るための交渉役と

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

なり、大司教区の承認を受ける際の立役者ともなった。Spiritual director が事実上不在の Divine Mercy にとっては、一宗教組織として教会との関係を保っていく上で大切な存在である。ところが、それにもかかわらず、教会と Divine Mercy との関係は必ずしも良好ではない。その要因には、近年の Divine Mercy の活動の拡大とメンバー数の急増がある。あまりにも急激に勢力を増大し、全宗教組織中最大勢力となった Divine Mercy に対して、教会は警戒し始めているのである。[26] また、折衝役となるはずのD神父自身が、現役時代には悪魔祓い等のスピリチュアルな方向に傾倒していたという経歴もあって、Divine Mercy は教会から懐疑のまなざしを注がれている。

以上の大枠としてのカトリック教会と Divine Mercy の関係を前提として、問題となるのが「憑依による啓示」の活動である。教会の指導下にある宗教組織としての Divine Mercy の活動が「より敬虔で成熟した信者育成」という目標のもと行われている限り、教会は公式に非難することはない。しかしながら、カトリック教会にとって、Divine Mercy の活動の中でどうしても認められないものが一つある。それが、「憑依による啓示」である。否認の理由としては以下のようなものが挙げられる。「そのようなものは、単なる心理学的な症状を単純な心の人々が信じてしまっているだけに過ぎない」（カピス大司教）というある種の科学主義を背景とした懐疑的な見解。また、「啓示の目的は救いだ。救いには、全ての人への救いと個々人への救いがある。前者ならすでにイエスが行っている。後者ならば、なぜ救いが必要な本人ではなく別の人物への憑依を通して啓示が行われるのか」（小教区司祭）という教義的な観点からの否認など。すなわち、「憑依による啓示」は、無知な人々の集合心性という社会心理学的、または精神分析的説明であれ、公式教義への不適合という解釈であれ、カトリック教会からは公式に否認されているのである。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

このようなカトリック教会による「憑依による啓示」の否認を、Divine Mercy側では十分に認識している。評議会や支部長など活動の主導的立場にある人々は、祭司や宗教組織連盟を通じて「憑依による啓示」についての教会側の見解を直接聞く機会も多い。また一般メンバーにしても、教会や小聖堂で「憑依による啓示」の否認についての誇張されたうわさを耳にすることがある。そのような教会による否認に対して、Divine Mercyはどのように反応しているのであろうか。よく聞かれるのは、以下のような説明である。「イエスや聖母マリアが直接会いに来て話してくれるという奇跡が起こるのは、私たちがいつも祈りを欠かさず熱心に信仰しているので特に愛されているから」(支部長)。つまり、「憑依による啓示」という出来事は奇跡としてとらえられており、その奇跡が他ならぬDivine Mercyで起こるのは自分たちの敬虔さゆえだということである。そのような「宗教的利己心」とでも呼ぶべき奇跡と敬虔さの関係について、以下のような語りが特徴的である。「先日バスの横転事故があった。その事故で他の乗客は全部死んだり大怪我をしたりしたのに、一人だけ乗っていたDivine Mercyのメンバーはかすり傷ですんだ。しかも、彼女は妊娠していて後日無事に男の子を出産した。その子の名前はDivine Mercyにちなんで"Divino"とつけたそうだ。この前の集会では聖母マリアがその事故について、『私もやはり身近にいる人たちから助けてあげたい』と語った」(一般メンバー)。これは、直接「憑依による啓示」が自分たちに起こることの説明ではないが、敬虔さゆえに排他的にDivine Mercyのメンバーのみに起こりうる奇跡についての説明となっている。すなわち、Divine Mercyやそのメンバーに起こる「憑依による啓示」をふくむ様々な奇跡は、自分たちの敬虔な信仰への報いであるということが主張されているのであり、またそれがそのまま教会の否認に対するDivine Mercyの反応だということができよう。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

以上を小括する。「憑依による啓示」は「癒し」と並んでDivine Mercyの活動の中で特徴的なものである。選ばれしミディウムに憑依した霊の啓示は、Divine Mercy全体にとっても、また各参加メンバーにとっても重要なものである。しかし、「憑依による啓示」の活動は、教会から否認されている。そのことについてDivine Mercy側は十分認識しており、「憑依による啓示」が教義的には非公式だと知っていても、自分たちの敬虔さへの報いとして起こりうる奇跡だと捉えているのである。

五　おわりに――教義と敬虔さ――

ここまでみてきたDivine Mercyの「癒し」と「憑依による啓示」の活動を、公式教義における正統性（orthodoxy）と異端性（heterodoxy）という観点からまとめると、以下のようになる。

①教会の指導下にある宗教組織の一つとして、Divine Mercyの使命は「正しい」カトリックの信仰を実践する敬虔な信徒育成である。その使命は「癒し」の活動において特に強調されている。そこでは、敬虔な信仰と祈りに対して病気の治癒が神の慈悲として与えられる。また、呪医の活動は「誤った」カトリック信仰実践として引き合いに出される。呪医の実践を非難することにより、Divine Mercyは自分たちの神への敬虔さと教義的な正統性を主張する。

②しかし、Divine Mercyの活動には異端性も見られる。「憑依による啓示」の活動はカトリック教会から否認されている。それに対しDivine Mercy側は、「憑依による啓示」のような奇跡が起こるのは自分たちの敬虔さへの報いだと説明する。その結果、彼らは教義的には異端である「憑依による啓示」の活動を、敬虔さゆえに行うと

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

いう一見矛盾する状況におかれる。

さて、本稿の冒頭に示した問題意識とは、当事者の主観的な宗教体験のリアリティと外部者による客観的判断の間にある距離感をどうするのかというものであった。そして、ここまで示してきたカリスマ刷新運動 Divine Mercy の事例にも、そのような主客認識の分離は見られる。Divine Mercy の「憑依による啓示」の活動は、カトリック教会から否認されている。それは、ときに客観的科学主義の形をとることもあるが、基本的に教会権力からの公式教義に照らし合わせた異端視である。しかしながら、「憑依による啓示」の活動参加者は、目前でミディウムに憑依している幼きイエスや聖母マリアとその啓示に疑う余地は無く、それをリアルなものとして経験しているのである。

そのような当事者と外部者の間の溝を埋めるのに便利な概念として、これも冒頭に示したフォーク・カトリシズムという概念装置があった。すなわち、教義的には非公式だと分類される行いであっても、依然として公式と非公式双方の領域を包含するカトリシズム連続モデル体の中にあり、それは在来の精霊信仰と融合したシンクレティックなフィリピンにおける民衆カトリシズムの一形態を呈しているという分析である。確かに、Divine Mercy のような事例を、フォーク・カトリシズムという分析概念によって語ることは可能かもしれない。また、実際そのような分析は他の事例に用いられてもいる。[27] だが、シンクレティズムという分析概念の無批判な援用に違和感を払拭できないのは、それが「記述の出発点でありえても分析の結論とはなりえない」[28] という指摘に見られるような考察の不十分さに加え、公式、非公式を決定する際に結局は教会という権威的外部者による指標を導入せざるを得ないということからである。そこには、方法論的客観主義とそこから生まれるオリエンタリズムの二重の問題が内包され

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ている。

では、Divine Mercyのメンバーという当事者は、自身の活動についてどのように語っていたか。思い出したいのは、Divine Mercyには「癒し」の活動の中で呪医を引き合いに出しながら教義的な正統性を強調するモードと、「憑依による啓示」において教義的な異端性を十分意識しながらそれでも活動を継続するモードの二つが共存していたということである。それは、ときに正統でありときに異端であるという一見矛盾するような揺れとして現れている。さらに、その矛盾は「敬虔」という一言によっていとも簡単に乗り越えられていた。正統であるはずの「癒し」においても病気の治癒という神の慈悲を求める敬虔さが、また異端だとされる「憑依による啓示」においても報いとしての奇跡を導く敬虔さが語られる。つまり、正統であっても敬虔、異端であっても敬虔という状況である。

敬虔という観点からDivine Mercyの「癒し」と「憑依による啓示」の活動を見つめなおした時、正統／異端や公式／非公式という二分法的視座はすでに意味をなしていないことに気づくだろう。なぜなら、Divine Mercyのメンバーたちは教義という権威的な外部評価基準を十分に認識した上で、自分たちにとってもっとも重要な敬虔さという価値を最優先しているからである。そのとき教義とは敬虔さを求めるための、ときに利用可能であり、ときにあえて無視することも可能な一つの象徴的資源にすぎない。正統と異端を使い分け、公式と非公式の領域を往来する彼／彼女たちに対して、教義によって公式か非公式を名付けるフォーク・カトリシズム的視座は有効性を失ってしまうのである。さらに言うならば、ここでは教義の重要性のみが問題となっているのではない。敬虔さ確保のため、ときには正統性を主張し、ときには異端性を受けとめるという柔軟なDivine Mercy側から眺めれば、それ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

は単なるカトリック教会や公式教義への追随ではない、絶え間なき微細な交渉によるずらしや変革の構えであるとすら考えることができるのである。[29] それは、宗教的リアリティと外部評価とのせめぎあいによる日常性の構築過程だと言い換えることもできるかもしれない。

主客認識の問題にひきつければ、宗教的リアリティの主観性か外部評価の客観性かという冒頭に掲げた問いが向かう先に、Divine Mercy は最初から存在していなかったということになる。Divine Mercy にとって、多くの場合権威的である客観的評価を意識しながら主観的リアリティを手放すことなく活動を継続するということは、ときに困難な問題ではなく乗り越えられており、ときに何とかして対処されている。さらには、そういう状況は多かれ少なかれどのような宗教的行いにも当てはまるともいえるだろう。そのような周回遅れの当たり前、すなわち教義から敬虔へという地点へたどり着くことにより得ることができた知見とは一体何だったのであろうか。それは、むしろ外部評価を行う側のまなざしの再考察へと連なるものだと筆者は考える。宗教経験のリアリティに対して無意識の内に想定していた主客認識の分離とは、盲目的に自分たちの信じることを追求する無知な民衆という欲望を投影した結果に過ぎなかったのではないだろうか。それは、信仰が首尾一貫したシステムであり、人々はその整合性に従いながら実践するという西洋キリスト教的価値観に裏打ちされた belief の practice への優先と、そのビジョンを当てはめることにより未熟な第三世界のキリスト教徒を描き出そうとするオリエンタリズム的まなざしの混在である。本稿では、直接的にはそういった欲望をカトリック教会という権威のうちに見てきた。しかし、ローカルな民衆キリスト教について、教会的な視線のすぐ傍らには研究者の注ぐまなざしがあったということも忘れてはいけないだろう。いかにキリスト教の唯一絶対の教えが在来信仰の文脈の上に浸透しうるかという教会的視点は、いか

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

に外来のキリスト教が伝統文化としての在来信仰と融合し吸収されるのかという伝統文化至上主義的視点ときわめて似通ったものだからである。[30] むしろ探求されるべきは、宗教的な教義やそれに基づく正統性が当事者の経験とどのように折り合いをつけており、かつそこからどのような宗教的リアリティが育まれ日々の宗教実践を含む日常を構成しているのかということであろう。本稿は、フィリピン一地方のある人々の敬虔さからそれを垣間見る試みであった。

註

(1) 二〇〇〇年度国勢調査による。

(2) 寺田は、前者をカトリック典礼暦にもとづく年中行事に代表される〈教会を中心とした宗教実践〉であり、後者はカルト活動に代表される〈教会を離れて行われる宗教実践〉だとしている。寺田勇文「外来と土着――フィリピンにおける民衆カトリシズム世界」(前田成文編『講座東南アジア学　第五巻　東南アジアの文化』一九九一年)、七〇頁。

(3) 後半の部分における限定については、「非公式」なものの内でもコミュニティでまだ受け入れられていない初期のものを除外するためと述べられている。Frank Lynch, "Folk Catholicism in the Philippine," in *Philippine Society and the Individual: Selected Essays of Frank Lynch, 1949-1976*, ed. by Aram A. Yengoyan and Perla Q. Makil (Michigan, Center for South and Southeast Asian Studies, University of Michigan, 1984), pp. 198-199.

(4) 関は、フィリピン・シキホール島における礼拝堂での祈願に、呪いと祈りの不可分性を見出し、教会側の視角を内包するフォーク・カトリシズムから「カトリック圏の民俗慣行あるいは生活世界」への視点の転換の必要性を指摘した。関一敏「キリスト教世界の祈りと呪い」(『民族学研究』第六二巻三号、一九九七年)、四〇二―四〇七頁。また川田は、日常的実践の地平からフォーク・カトリシズム概念の脱構築を試みた。その際に、日常生活の運営においてはフォークの領域とカトリシズムの領域は混在しており、その間にある「・(なかぐろ)」への注目が必要だとしている。川田牧人『祈りと祀りの日常知――フィリピン・ビサヤ地方バンタヤン島民族誌』九州大学出版会、二〇〇三年、一一―一四頁。

(5) もちろん、このような教会側による周縁化とは別のレベルで、フィリピン低地社会の文化的特性を表す分析概念としてフォー

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ク・カトリシズムは用いられてもいる。この分析概念のレベルについては本稿の最後に再び取り扱うが、ここでは次の点を指摘しておきたい。それは、フォーク・カトリシズムの概念化を行ったリンチ自身が文化人類学者でありながら、イエズス会の神父でもあったという事実である。そこには、フィリピン低地社会の文化特性としてのシンクレティズムに注目しながら、それをカトリック教義から非公式であると評価すべきであったという立場の二重性がみられる。

(6) 本稿に関わる現地調査はカピス州にて、二〇〇二年から二〇〇三年にかけての約一年半と、その後補充調査として二〇〇四年から二〇〇六年の毎年数週間ずつ行われた。調査は、平成一四年度笹川科学研究助成（財団法人日本科学協会）と、平成一六年度および平成一七年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）を受け、アテネオ・デ・マニラ大学付属フィリピン文化研究所（Institute of Philippine Culture, Ateneo de Manila University）客員研究員として行われた。

(7) 文中の現地呼称の表記の内、通常字体は英語によるもの、斜体はヒリガイノン語によるものである。

(8) 二〇〇〇年度国勢調査による。

(9) カピス大司教区は、一九七六年にカピス教区から昇進した。現在の大司教は、Onesimo Cadiz Gordoncillo 氏。大司教区内の小教区数は三十。司祭数は八十九名。一司祭あたりの信徒数は七二六八人である。http://catholic-hierarchy.org/diocese/dcapz.html（二〇〇五年七月十三日閲覧）

(10) フランシス・サリバン（小林有方訳）『霊の賜物とカリスマ刷新』聖母文庫、一九九三年、八九頁。

(11) 例えば、カピス大司教区内の一教区では、宗教組織連盟（Federation of Religious Organization）に所属している宗教組織が二〇〇三年の時点で二十八団体あった。

(12) ある教区司祭は宗教組織の活動について、「本来ならば全ての宗教組織が慈善（Charity）、信心（Piety）、伝道（Apostle）を三本柱として活動するべきである。しかし、礼拝や教会の活動の補助的なものと、カリスマ刷新運動的なものとに分かれているのが実情である」と述べている。

(13) 現在の全支部数は二十五であり、その内訳はカピス州内の全十七市町から各一支部と、その中から地域が広すぎるか参加者が多すぎるために分割された三支部、そしてカピス州外に五支部となっている。付け加えれば、州外の五支部は全てパナイ島内の他州に設置されている。

(14) 参与観察することができた黙想会の新加入者人数は、二〇〇三年二月が一九二四人、二〇〇三年三月が二六〇五人、二〇〇三年七月が一五五一人、二〇〇三年八月が二一二七人、二〇〇三年十月が一八三一人となっている（Divine Mercy の公式発表による）。参加者の交通費や食費が当然問題となるが、先述の富豪O家はここでも交通手段としてトラックを出したり、炊き出し

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

を行ったりすることで経済的支援をおこなっている。

(15) 例えば初日、黙想会の開始と共に、新加入者は目隠しをされ裸足で丘の上にある黙想会場まで一列で歩いて上っていく。その時、既参加メンバーは新加入者の列を挟むようにして二列で立ち並び、新加入者が無事にたどり着けるように声をかけ支える。また二日目には、黙想会の周囲を既参加者が立ち並び、新加入者は歩き回りながら全員と握手をしてともに加入を祝福する。翌月の第一日曜日に行われるキャンドル・ライティングは、加入式としての黙想会の卒業式的なものである。

(16) カピス州内には、公立病院が六つ、私立病院が三つある。その内、公立が一つ、私立が三つと州都ロハス市内に集中する傾向があるが、そのほか無数にあるクリニックや薬局を含めると、近代医療施設普及の第一次段階は完了したとみていいだろう。

(17) Healing Ministry の独自の活動として、集会に参加することができない遠隔地のメンバーのところに赴いて「癒し」をおこなう「ミッション」(mission) とよばれるものがある。

(18) 集会で大人数の病者に対して祈りが行われる場合、前日までにD神父が祈禱した聖水が大量に準備される。

(19) 「未熟なフィリピンのカトリック信徒」という点について、これは Divine Mercy 独自の見解であるというよりも、教会権威の見解に従ったものであるといえる。例えば宮脇は、フィリピン・カトリック教会が自国の信徒を「未熟」であり「成熟」が必要な状態にあると捉えていることについて述べている。宮脇聡史「『キリスト教国フィリピン』の現代カトリック教会の社会観・社会関与——その教会観との関わり」(『東京基督教大学紀要　キリスト教と社会』第十三号、二〇〇三年)、一五頁。また、カピス州の小教区司祭に対する筆者の聞き取り調査でも、同州のカトリック信徒の問題として「迷信の信仰と実践」が挙げられている。

(20) 呪医の活動について、紙幅の都合のためここでは詳しく扱えない。詳細については、リーバンを参照のこと。Richard Lieban, *Cebuano Sorcery* (California, University of California Press, 1967).

(21) もっとも、この批判の中には、聖霊と精霊の意図的な混同による神／悪魔の二分法的神学への取り込みや、「やつらに食べ物を捧げて、一時的に病気は良くなるかもしれない。しかし、やつらは供物欲しさにきっとまた戻ってくる。そして病気は何度も繰り返す (*balik-balik*) だろう」という発言に見られるような実在論的思考が含まれている。これは、在来の精霊信仰に対するカトリック教義の適用であると同時に、カトリック教義解釈の拡大と読み替えによる、在来信仰の取り込みともなっている。この点は、次節以降の論点を先取りする形で関連している。

(22) 黙想会ではときに、新加入者が身に着けているお守りを没収する「お守り狩り」を行うこともある。

(23) 調査では、呪医から転身したヒーラーが二名確認できた。その他に Divine Mercy での公然としづらい雰囲気と、自身が不名

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

誉だと考えていることから、呪医としての前身を秘密にしているヒーラーの存在も推測できる。なお本稿では、Divine Mercy側からみた呪医の状況についてしか取り扱っていない。カトリックからの「異端」視に対する呪医の微細な交渉と実践については、拙稿を参照のこと。東賢太朗「親密な他者――フィリピン地方都市の呪医実践より」(『文化人類学』第七一巻一号、二〇〇六年)、一―二二頁。

(24) 男女のミディウム間で憑依霊が異なるのは、声の高低の違いだとメンバーは説明する。ミディウムにとって、憑依時に通常時よりも高い/低い声を発し続けることが大変な負担となるからである。

(25) カピス州大司教はspiritual director制度について、「信徒たちだけで活動していると方向を見失うことがあるため司祭による指導が必要である」と述べている。

(26) 一例として、黙想会の行われる第二土曜と日曜には、メンバーの多くがDivine Mercyの黙想会場に行くため、教会礼拝の参加者が減少するという現象が出てきている。また、教会による警戒の背景には、同様にカトリックの宗教組織から出発して巨大な宗教的かつ政治的勢力となったEl Shaddaiのケースがあると考えられる。

(27) 寺田は南タガログ地域の宗教集団サマハンにおける幼きイエスの憑依および信徒とのコミュニケーションを、先スペイン期の精霊崇拝やシャーマニズムの影響からフォーク・カトリシズムとして分析している。寺田勇文「サント・ニーニョ――フィリピンのフォーク・カトリシズム」(『季刊民族学』二十五号、一九八三年)、一一九―一二六頁。

(28) 関本照夫「ジャワ聖墓巡礼考――イスラームと土着的伝統主義」(中牧弘允編『神々の相克』新泉社、一九八二年)、一三八頁。

(29) 同様のことは、近年のシンクレティズムに関する議論でも取り上げられている。多くの場合知識人によって見出される外来と在来の融合を強調するシンクレティズムに対して、自文化の在来性を強調し反シンクレティズムと呼ばれるような主張を行う信仰の当事者という主に第三世界を舞台とした対立の構図が近年描かれている。そこに見られるのは、シンクレティズムであっても反シンクレティズムであっても、ローカルな地平で行われる信仰実践を反省的かつ遡及的にラベリングしていく本質主義的な視点を含んでいるということである。Rosalind Shaw and Stewart Charles, "Introduction: Problematizing Syncretism," in *Syncretism/Anti-Syncretism: The Politics of Religious Synthesis*, ed. By Charles Stewart and Rosalind Shaw (London, Routledge, 1994), pp. 1-16. また、シンクレティズム論に対しては、いくつかの宗教領域間の柔軟な移動が西欧近代的な「信仰」(belief) という首尾一貫したシステムとしてではなく、むしろ内的な「信じること」(believing) という観点から説明可能であるとする論点が提出されている。Thomas G. Kirsch, "Restaging the Will to Believe: Religious Pluralism, Anti-

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

Syncretism, and the Problem of Belief," in *American Anthropologist*, 106/4, 2004, pp. 699–709. 本稿も基本的にその立場に賛同するものである。

(30) 沖縄の福音系教会の事例研究を行った池上は、民衆キリスト教について、神学的立場と地域文化至上主義の立場双方を退け、「宗教的人間」を前提とした宗教的視点からの理解の必要性を提唱している。池上良正『悪霊と聖霊の舞台——沖縄の民衆キリスト教に見る救済世界』どうぶつ社、一九九一年、一二—二三頁。

付記

本稿は、二〇〇五年三月の第十九回国際宗教学宗教史会議世界大会における口頭発表原稿（Azuma Kentarō, "Doctrine and Devoutness: A Study of a Catholic Charismatic Movement in the Province of Capiz, Philippines"）をもとに加筆修正したものである。会場での適切かつエンカレッジングなコメントに感謝する。

NII-Electronic Library Service